

サケ（シロザケ）日本系

Chum Salmon, *Oncorhynchus keta*



管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会（NPAFC）
日口漁業合同委員会

利用・用途

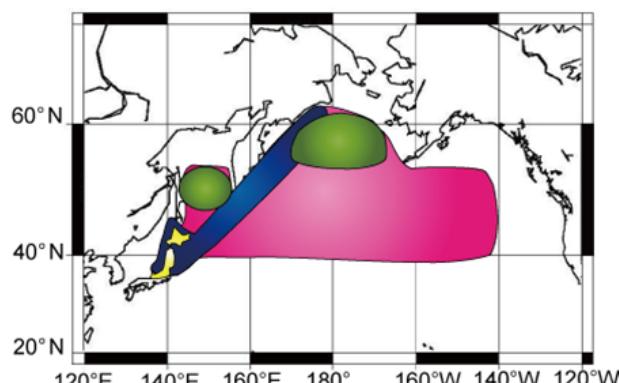
用途は広く、塩蔵品（新巻、山漬、定塩）、生鮮・冷凍品（焼き魚、石狩鍋、三平汁、チャンチャン焼き、ステーキ、ムニエル、ルイベ）、乾製品（トバ等）、燻製、フレーク、練り製品、缶詰、氷頭なます、飯寿司、塩辛（めふん）等がある。魚卵製品として、すじこ、いくらがある。成魚の皮は、かつて民芸品とされていたが、現在はコラーゲン抽出の原材料として注目されている。

生物学的特性

- 体長・体重：尾叉長 1.08 m・11.5 kg
- 寿命・成熟年齢：2～8 歳
- 産卵期・産卵場：秋～冬、北日本の河川
- 索餌期・索餌場：夏、オホーツク海（海洋年齢 1 年目）、ベーリング海（海洋年齢 2 年目以降）
- 食性：水生昆虫・落下昆虫（河川）、動物プランクトン・マイクロエクソントン（海洋）
- 捕食者：ウトウなど海鳥・ウグイなど魚類（幼魚）、ネズミザメなど大型魚類・おっとせいなど海産哺乳類（未成魚・成魚）、ヒグマなどの陸生肉食動物（成魚）

漁業の特徴

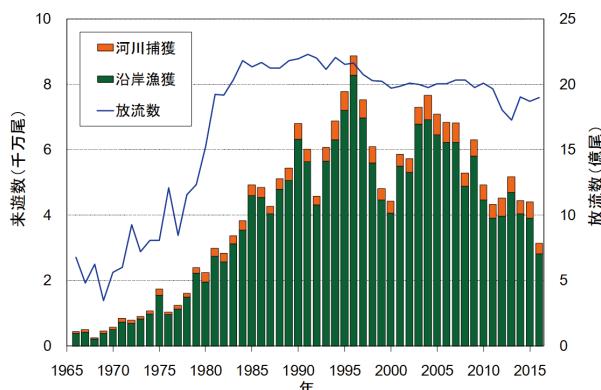
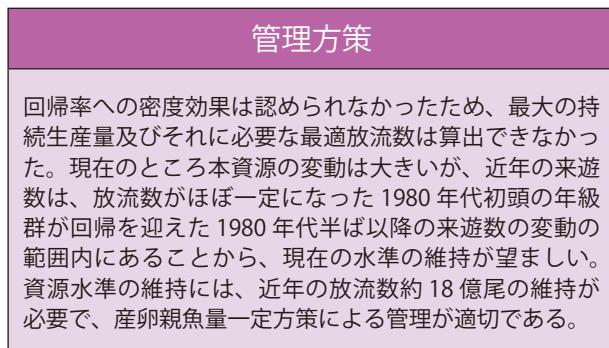
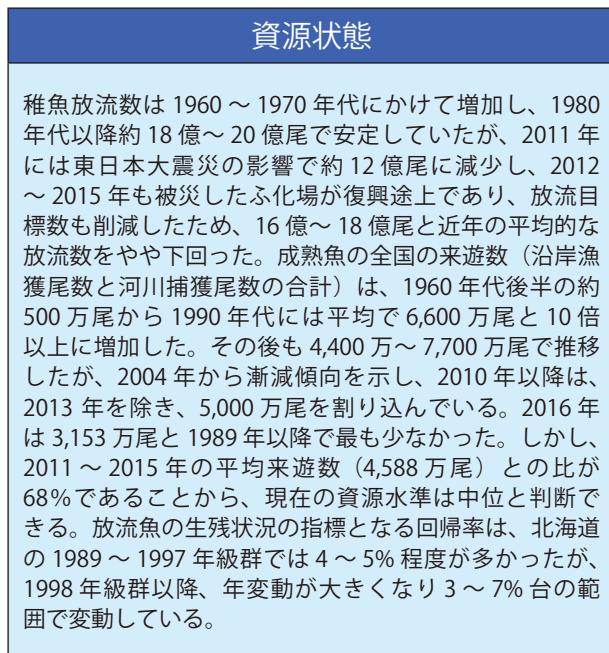
第二次世界大戦後、1952 年に北洋さけます漁業が再開されると流し網による沖獲りが発展したが、1977 年に 200 海里水域が設定され、さらに母川国主義の考えが定着すると、沖獲り漁業は著しく後退した。北太平洋公海でのさけ・ます漁業は禁止されている。流し網漁業は、2015 年以前までロシア及び日本 200 海里水域において春から初夏に実施されていた。これら沖獲り漁業の対象はロシア系が主体であり、日本系の割合は僅かと考えられている。なお、2016 年からロシア水域での流し網漁業は禁止された。1970 年代に入ると日本沿岸での漁獲量が増加した。日本系資源の大半は、夏から冬季にかけて主に北日本の産卵河川周辺の沿岸で定置網等により漁獲される。他国経済水域内での本種系群の漁獲量は不明である。日本で増殖対象となっている溯河性さけ・ます類のうち最も漁獲量が多い。



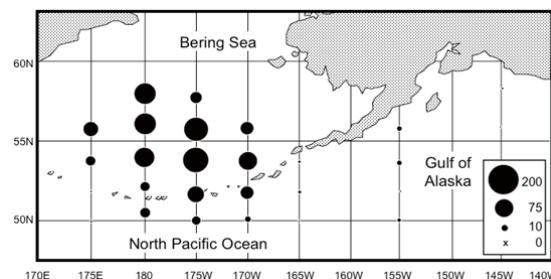
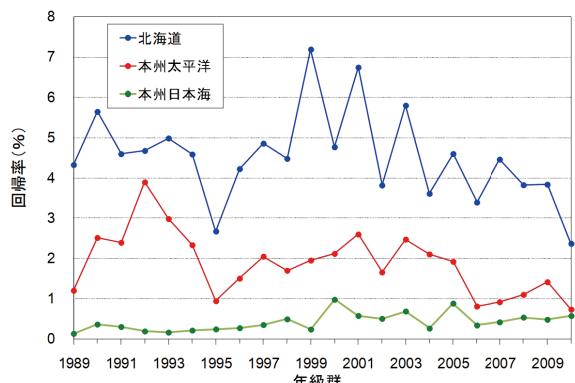
日本系サケの分布（黄色：産卵地域、青色：漁場海域、赤色：分布海域、緑色：索餌（夏季）海域）

漁獲の動向

1970 年代から沖合域の漁獲量は徐々に減少し、同時に沿岸域の定置網による漁獲量が増加した。沖合域ではロシア系が主な漁獲対象であり、日本系の漁獲量は僅かと考えられている。最近 5 年間（2012～2016 年）の漁獲量は 9 万～16 万トン、2016 年の漁獲量は 9.6 万トンであった。



サケの来遊数（沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計値）と放流数

8～9 月のベーリング海に分布する日本系サケ未成魚
遺伝的系群識別により推定された CPUE（トロール網 1 時間曳きあたりの採集個体数）。

日本各地におけるサケの回帰率の推移

回帰率とは、各年級群の 2～6 年魚の来遊数合計値をその年級群の放流数で除した割合（%）とする。

サケ（シロザケ）（日本系）の資源の現況（要約表）	
資源水準	中 位
資源動向	減 少
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	—
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	9 万～16 万トン 最近（2016）年：9.6 万トン 平均：12.9 万トン（2012～2016 年）
管理目標	現在の資源水準の維持
資源評価の方法	漁獲尾数
資源の状態	2016 年の回帰数 / 目標値：0.63 (目標値：漁期年漁獲数；最近 10 年 平均 4,946 万尾)
管理措置	持続的漁獲量：3,878 万尾（12.7 万トン） 稚魚放流数：18 億尾 幼魚・未成魚・成魚期 EEZ 外、成魚 期河川内禁漁 (成魚期日本 EEZ 内のみ漁獲可能)
最新の資源評価年	—
最新の資源評価年	—